



Ensemble Dimanche

アンサンブル ディマンシュ 第97回演奏会

2025年9月21日(日)

調布市文化会館たづくり くすのきホール

【プログラム】

～オーストリアの作曲家の古典的作品～

モーツァルト

歌劇「ドン・ジョヴァンニ」序曲 K.527

ハイドン

交響曲第103番変ホ長調「太鼓連打」(ロンドン初演版)

♪ ♪ 休憩 ♪ ♪

シューベルト

交響曲第4番ハ短調「悲劇的」 D.417

【曲目紹介】

◆モーツァルト:歌劇「ドン・ジョヴァンニ」序曲

歌劇「ドン・ジョヴァンニ」は、モーツァルト(1756-91)が作曲した2幕からなる悲劇で、1787年10月29日にプラハで初演されています。この歌劇の基になっているのは、スペインの伝説の放蕩者「ドン・ファン」の物語で、正式な歌劇の名称は、「罰せられた放蕩者＝ドン・ジョヴァンニ」です。この序曲は、正真正銘この歌劇のために作られた序曲です。と言うと語弊があるかもしれませんが、当時の序曲は、歌劇の内容とは関係なく作られるのが普通で、時には別の歌劇に「使い回し」されることもありました。序曲の使い回しと言え、サリエリ(1750-1825)やロッシーニ(1792-1868)が有名ですが、モーツァルトの場合は、序曲の使い回しはないと思われます。特にこの序曲に関しては、当時としては珍しく歌劇中の1シーンの音楽が使われているため、歌劇と「紐付き」になっています。

この曲は、ゆったりとした序奏と速い主部から構成されています。

序奏 Andante ニ短調:全合奏によるニ短調の和音で始まり、暗く重々しく進みますが、これは、歌劇第2幕第5場のフィナーレのシーンの音楽です。このシーンでは、ドン・ジョヴァンニに殺された騎士長の墓の「石像」が、食事会の会場に突然登場し、ドン・ジョヴァンニに過去の罪を悔い改めるように迫ります。ドン・ジョヴァンニは頑なに拒否をしますが、押し問答の末、そこに地獄の炎が現われて、ドン・ジョヴァンニを地獄に引きずり込みます。

主部 Molto allegro ニ長調:序奏とは打って変わって明るく軽快な音楽ですが、歌劇とは特に関係ありません。強いて言えば、ドン・ジョヴァンニの放蕩ぶりを表しているようにも聞こえます。第一主題の旋律は、交響曲第38番「プラハ」第1楽章の第一主題とよく似ています。この交響曲は、この歌劇の初演と同じ1787年の1月にプラハで初演されています。

◆ハイドン:交響曲第103番変ホ長調「太鼓連打」

この曲は、序奏の前にティンパニがソロで長く連打する導入部分があるため、「太鼓連打」という愛称で呼ばれています。この導入部分には「intrada(イントラダ)」と記されています。イントラダとは、バレエなどで主要人物が登場する際の導入音楽で、落語で言う「出囃子」のようなものです。(歌舞伎の出囃子は意味が違います。)当時は、ティンパニ奏者がカデンツァ風に自由に演奏し、それに合わせて指揮者が登場するという演出があったのかもしれません。

ハイドン(1732-1809)は1791～92年と1794～95年に2回ロンドンを訪問します。2回目の訪問で初演された交響曲が第99番～第104番の6曲で、この曲は1795年の3月2日に初演されています。ハイドンの帰国後、ウィーンでも初演されますが、この時ハイドンは、第4楽章のコーダ部分を少し手直しして、13小節短くしています。一般に演奏されているのは、このウィーン初演版です。ロンドン初演版の楽譜は出版されていませんでしたが、1968年に出版されたハイドン・モーツァルト・プレス(HMP)社版には、巻末に改訂前の第4楽章コーダ部分が付録として掲載されています。今回は、このロンドン初演版で演奏します。

この曲には2本のクラリネットが入っていますが、従来の楽譜では、第2楽章と第3楽章がタチェット(楽章休止)になっています。ところが、前述のHMP社版では、第3楽章にクラリネットが入っていて、特にトリオで活躍します。この版は、大英博物館に所蔵されているハイドンの自筆譜を基にしているのですが、第3楽章に関しては、ハイドンの筆跡でないページが3ページも含まれており、その筆跡が誰のものかは分かっていないため、クラリネット・パートをハイドンが書いた(又は書かせた)ものなのか、誰かが勝手に加筆したものなのかはミステリーです。

この曲の第2楽章や第4楽章の主題は、クロアチア民謡からの引用であると言われています。ハイドンとクロアチア民謡との接点がよく分かりませんが、当時のオーストリア大公国が、現在のクロアチアの北半分を含む広大な国であったということを考えると、この説も頷けます。一方、ハイドンがロンドンから帰国した翌年の1796年に書いた「オーストリア皇帝讃歌」の旋律(現在のドイツ国歌)は、その最初の部分がクロアチア民謡「美しき花嫁」とそっくりで、同民謡からの引用であるという説があります。この説によると、ハイドンが1761年から楽士長として約30年間仕えていたエステルハーヅ家の夏の離宮・エステルハーヅ宮殿(現在はハンガリー領)で過ごしたときに、この民謡を聴いたのではないかということです。ちなみに、有名な交響曲第45番「告别」は、この宮殿での生活が長くなった楽士たちの帰郷の思いを伝えるために書かれたと言われています。そのほか、ハイドンの先祖がクロアチア人だったという説もあるようですが、これは否定されているようです。

第1楽章 Adagio - Allegro con spirito 変ホ長調 3/4-6/8拍子

序奏の前にフェルマータの付いた1小節の「太鼓連打」の導入部分があります。主部の第一主題は、弱拍にアクセントを置くシンコペーションを伴った軽快な音楽です。それに続く第二主題はワルツ風の伴奏を伴った楽しい音楽です。展開部の途中では、中低弦により序奏の主題がワルツ風に再現されます。再現部が終わるとコーダの前で序奏が短縮されて再現されます。

第2楽章 Andante più tosto Allegretto ハ短調 2/4拍子

「アレグレットに近いアンダンテ」と標記されています。2/4拍子の変奏曲形式で、第94番「驚愕」、第101番「時計」などと共通しています。クロアチア民謡からの引用と言われている短調の主要主題とそれから派生した長調の副主題が交互に変奏していく二重変奏曲ですが、副主題は主要主題の変奏の一部とも考えられます。

第3楽章 Menuetto 変ホ長調 3/4拍子

メヌエットとトリオです。ハイドンのメヌエットは、モデラート、アレグレット、アレグロ、アレグロ・モルトと、テンポ設定が厳格ですが、このメヌエットにはテンポ標記がありません。メヌエットのテンポでということでしょうか。装飾音符を伴って跳躍・急降下する元気のいいメヌエットに対し、優雅なトリオでは2本のクラリネットが活躍します。

第4楽章 Finale, Allegro con spirito 変ホ長調 2/2拍子

2本のホルンによる4小節の序奏の後、「運命の動機」のリズムを伴った主部が始まります。この主題はクロアチア民謡からの引用と言われています。「運命の動機」のリズムは楽章全体を支配し、追いかけてこしながら進みます。コーダからはロンドン初演版に入ります。途中2小節のGP(ゲネラル・パウゼ＝全楽器休止)がこの版の目印です。

◆シューベルト:交響曲第4番ハ短調「悲劇的」D.417

この曲は、シューベルト(1797-1828)が1813～18年(16～21歳)に作曲した6曲の初期交響曲の中の1曲で、1816年4月(19歳のとき)に完成していますが、作曲の経緯や演奏の状況などの詳細はよく分かっていません。この曲は、未完の曲を除くと唯一の短調の曲で、「悲劇的(Tragische)」という愛称が付いています。この「悲劇的」という愛称は、シューベルト自身が付けたと言われています。シューベルトの交響曲の中で、自身が愛称を付けたとされているのは、この曲のみです。

この曲は古典的で、シューベルトが尊敬していたハイドンやモーツァルトの影響を色濃く受けています。それだけではなく、この曲には、ベートーヴェン(1770-1827)の交響曲第5番「運命」の影響が見られます。第1及び第3楽章はハ短調、第2楽章は変イ長調で、「運命」と共通しています。また、この曲の第1楽章の主部の第一主題は、「タタタタン」という「運命の動機」のリズムで始まり、このリズムは第2楽章の副主題や第3楽章のトリオでも出てきます。さらに、第4楽章の第一主題は、「ターンタタタ」というその反転型になっています。つまり、全楽章が「運命の動機」のリズムで統一されていると言えます。

この曲の公式な初演は、曲の完成後33年も経った1849年11月にライプツヒで行われています。シューベルトの交響曲で、生前に公式に初演され、出版された曲は1曲もありません。一番早く初演されたのは、「小ハ長調」と呼ばれている第6番です。本来、シューベルトは第8(9)番「グレート(大ハ長調)」の初演を希望し、ウィーン楽友協会に総譜を提出していたのですが、長くて難しいとの理由で返却されたため、その代用として第6番を初演することとしたのです。この第6番の初演は、1828年12月14日に行われていますが、シューベルトはこの初演に立ち会うことなく、その1ヵ月前の11月19日に亡くなっていました。

第1楽章 Adagio molto - Allegro vivace ハ短調 3/4-4/4拍子

全楽器によるハ短調の和音の後、六度と七度の跳躍を伴った嘆きのようなモチーフが繰り返される序奏で始まります。この序奏は、ハイドンのオラトリオ「創造」の序曲「混沌の表象」がモデルだと言われています。主部に入ると「運命の動機」のリズムを持った「ソラシド」という音型(以下、「第1楽章の音型」という。)で始まる第一主題に入ります。この主部は、ベートーヴェンの弦楽四重奏曲第4番ハ短調の同楽章がモデルです。

第2楽章 Andante 変イ長調 2/4拍子

歌曲を思わせる主要主題Aと「第1楽章の音型」で始まる短調の副主題BがA-B-A-B-Aという形で交互に出てきますが、それぞれが出てくる度に少しずつ形を変えています。副主題Bは、最初はハ短調ですが、2度目は変ロ短調に変わっています。

第3楽章 Menuetto, Allegro vivace ハ短調 3/4拍子

メヌエットと標記されていますが、実質はスケルツォです。メヌエットの主題は、小さな3拍子2小節で大きな3拍子を形成する「エミオラ(ヘミオラ)」という技法で書かれています。しかも、楽譜上は3拍目から始まっているのに、アクセントがついているため、聴くと1拍目から始まっているように錯覚します。トリオは変ホ長調に変わり「第1楽章の音型」で始まる長閑な音楽です。

第4楽章 Allegro ハ短調 2/2拍子

4小節の序奏に続く第一主題は「ターン・タタタ」という「運命の動機」のリズムの反転型で始まります。第二主題では「アイ・アイ」と呑気に歌っているような下向音型が交互に出てきますが、その裏では、第2ヴァイオリンとヴィオラが地獄の無窮動の伴奏をしています。この二つのパートにとっては、「悲劇的」な楽章です。

【指揮者プロフィール】

平川 範幸
(ひらかわ のりゆき)



福岡県出身。福岡教育大学卒業。上野学園大学研究生＜指揮専門＞にて下野竜也、大河内雅彦の各氏に師事。桐朋学園大学オープンカレッジにて、黒岩英臣、沼尻竜典の各氏に師事。音楽理論を中原達彦氏に、ピアノを田中美江氏に師事。

東京音楽大学特別講座にて、パーヴォ・ヤルヴィの指揮公開マスタークラスを受講。その模様がNHK「クラシック音楽館」にて放送される。

新日鉄住金文化財団指揮研究員として、紀尾井シンフォニエッタ東京、東京フィルハーモニー交響楽団の下で活動する。その後東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団指揮研究員として、宮本文昭、飯守泰次郎、矢崎彦太郎の各氏をはじめとする指揮者の下で研鑽を積む。

2016年、サントリーホールで開催された「こどもたちのコンサート」特別公演にて、ウィーン・フィルのメンバーと仙台ジュニアオーケストラの合同演奏を指揮する。同年、浜松フィルハーモニー管弦楽団の演奏会にて、ベルリン・フィルのオーボエ奏者、クリストフ・ハルトマンやクラリネット奏者のヴェンツェル・フックス、ホルン奏者のシュテファン・ドゥ・ルヴァル・イエジエンスキーの各氏らと共演する。

これまでに、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、大阪交響楽団、オーケストラ・アンサンブル金沢、仙台フィルハーモニー管弦楽団、千葉交響楽団、九州交響楽団、東京混声合唱団、広島ウインドオーケストラなどを指揮する。

2016年より2021年まで、仙台ジュニアオーケストラ音楽監督を務める。

2024年に大阪交響楽団、九州交響楽団それぞれの主催公演を指揮する。

2025年より、福岡教育大学非常勤講師を務める。

♪ 第97回出演者 ♪

フルート	谷口玲子 徳植俊之
オーボエ	市川亜理 山口高司
クラリネット	鈴木千暁 中嶋智子
ファゴット	越島康太郎 星野未央
ホルン	尾形武一 友田昭博 町田明子 由川 裕
トランペット	内田直大 木村 晃
パーカッション	星野武徳

1stヴァイオリン ◎時山響子 三瓶政一 鈴木陽子 西川富之 西村 実 本山まり子

2ndヴァイオリン ○森 未知 相羽あゆみ 笹沢幸生 松前 巖 宮本 敦 吉村幹子

ヴィオラ ○関口孝司郎 柴野かおり 下山純也 中島詩歩 山口 彰

チェロ ○植田圭司 緒方 淳 永田隆司 中山憲一 三次摂子

コントラバス ○須賀敬亮 江川博之

◎コンサートマスター ○弦楽トップ

トレーナー 戸澤哲夫(東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団コンサートマスター)
練習指揮 山上孝秋

♪ 次回の演奏会ご案内 ♪

日時：2026年2月21日(土) 14:00開演

場所：IMAホール(光が丘)

曲目：未定

指揮：平川 範幸



詳細はHP <http://www.e-dimanche.jp/> をご覧ください。

※招待券をご希望の方は、アンケートにご記入ください。

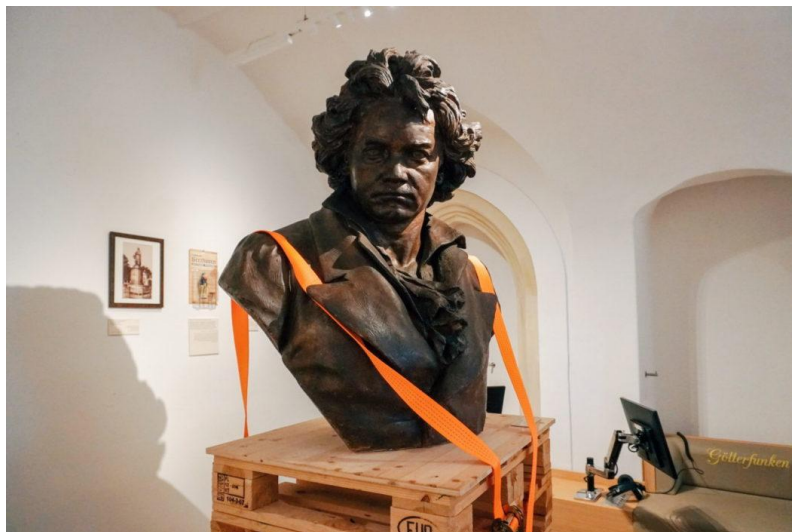
本日のアンコールについて

本日のアンコールは、

ベートーヴェン：メヌエット・ト長調（管弦楽編曲版）

でした。

この曲は、ヴァイオリンとピアノのための小品として有名で、ヴァイオリンの教則本などにも掲載されていますが、原曲はピアノ独奏用の「**6つのメヌエット WoO 10 の第2曲ト長調**」です。オリジナルは管弦楽のために書かれ、それがピアノ独奏用に編曲されたものですが、管弦楽版は、楽譜が消失してしまったため、今ではどのような音色がしたのか知る由もありません。本日は、当団の編成に合わせた管弦楽編曲版で演奏しました。



ウィーン郊外にあるベートーヴェン博物館（ハイリゲンシュタット遺書の家）

オーストリアの作曲家の作品集に何故ドイツの作曲家のベートーヴェンをアンコールに登場させるのか、疑問に思うかもしれません。確かにベートーヴェンは、厳密に言うとドイツのボンで生まれた作曲家ですが、21歳の時(1792年11月)からウィーンで活動を始め、56歳で死ぬまで故郷に戻ることはありませんでした。そして、「上はハイドン、モーツァルト、下はシューベルト、3人それぞれと結び付きのあるベートーヴェンを入れないと、このテーマは完成しない。」とは、指揮者の弁です。